2021 年度

慶應義塾大学体育研究所

基盤研究報告書

慶應義塾大学体育研究所

慶應義塾大学体育研究所・公社）全国大学体育連合関東支部共催シンポジウム

「オンライン（遠隔）体育実技における成績評価を考える」

実施報告

～はじめに～

2021 年 12 月 11 日(土)15：00-17：00、Zoom Meeting を利用し、標記シンポジウムを開催した。参加者は 67 名（シンポジストらを含む、事前参加登録者 61 名）であった。
本シンポジウムの趣旨を以下に示す。

コロナ禍で大学体育にもオンライン（遠隔）授業が導入された中、昨年は、「コロナ禍のオンライン体育実技を振り返る～今後の遠隔実技のあり方と共に～」というテーマで議論を行った。その中で、遠隔授業の実施に対する新たな工夫や取り組みを知るとともに困難や課題も浮き彫りになってきた。その 1 つが、成績評価についてである。遠隔による実技実施では対面における実施内容を変更して実施せざるを得ない状況も生じていると考えられる。しかし、前回のシンポジウムでは十分に議論することができなかった。そこで、本年のシンポジウムでは、遠隔体育実技における成績評価の内容及び方法について、Web アンケート調査による実態の分析及び実際の事例報告を交え、その課題について議論する。そして、ポストコロナにおける大学体育のねらいと意義を再構築する糸口を探りたいと考える。

～シンポジスト発表～

コーディネーター（永田、慶應義塾大学体育研究所）の趣旨説明に続き、シンポジストとして以下の 3 名に発表いただいた。

●寺岡英晋（慶應義塾大学体育研究所）
『遠隔授業における大学体育実技の授業目標と評価方法に関する実態調査の概要分析』

●上田憲嗣（立命館大学スポーツ健康科学部）
『遠隔授業における成績評価のありかた ～評価方法の変更を例に～』

●西脇雅人（大阪工業大学工学部）
『遠隔授業における成績評価の事例報告 ～講義・実技・演習の複合スタイルを例に～』

発表の内容はアーカイブ映像およびパンフレットの要旨（巻末）を参照ください。
シンポジスト発表映像 **URL**：
https://drive.google.com/drive/folders/1n50W2yLWQw3_9D5VSKiRKN7HjEtEyPcd?usp=drive_link

～ディスカッションの要点および総括～

指定討論者の江口先生（産業能率大学・(公社) 全国大学体育連合関東支部長）から議論の方向性を示されたのち、Zoom Meeting の Chat に寄せられた質問への応答を含め、3 名のシンポジストといくつかのポイントについて議論を行った。以下にその要点と総括をまとめた。

1. COVID-19 感染拡大による対応を経た、教養体育に対する意識の変化について

- オンデマンド型授業において構築されてきた教材やノウハウの有用性を感じる一方で、“実技”であることの意義や対面の重要性を改めて感じることとなった（上田先生：立命館大学)。
- オンデマンド型授業は、教材等をうまく活用することで授業を実施することができることがわかった。しかし、社会性のスキルを高めることの難しさ、不完全燃焼だったという学生のコメントからも、体育授業は対面で行うべきものではないかという印象を持っている。完全対面授業が見通せない状況では、オンデマンド資料を反転授業として、授業間の質の維持に使うなどの補強サプリとして使用できるのではないかという意見が出ている (西脇先生 : 大阪工業大学)。
- 今回の調査では、反転授業を活用するなどのオンデマンド形式の学習に利点を感じ、活用しているという報告があった（寺岡先生：慶應義塾大学)。

両先生ともに、COVID-19 によって対面で行うことの重要性を再認識したという感想であった。体育授業においては，対面で身体活動を行うことが，様々な教育的効果を得るための必要条件であるという共通認識であった。また、COVID-19 感染拡大期において用いたオンデマンド型授業の試みは、教育的効果を高めることにおいて有用であり、今後はどのように活用していくかについて議論が進んだ。

2. 対面形式、オンデマンド形式における技能・汎用的能力の評価について

〇担当部門内での評価観点の共通化について

- COVID-19 感染拡大前の授業においては、評価の観点についての共通化はしていなかった。これは、多様な種目を開講しているために共通化が困難であったことが理由としてある。オンデマンド形式を取り入れた後は，共通する教材を取り入れたことにより，共通の評価基準を設けることとなった。今後は、共通教材を有効活用することで、授業目的と評価の一体化が図れるのではないかと検討を進めている（上田先生：立命館大学)。
- 大阪工業大学は、文部科学省の大学教育再生加速プログラムを受けており、大学として授業のねらいを定める，評価基準を明確にするということが当たり前となっている。そのための活動として、非常勤講師に説明する機会を設ける、共通教材を用いて統一的なプログラムを提供できるようにしている（西脇先生：大阪工業大学)。
- COVID-19 感染拡大以前，汎用的能力の評価については、いくつかの大学は明確なルーブリックや尺度を用いて評価を行っていたが，多くの大学において担当教員の観察に任せていた。その後、オンライン形式の授業では、多くの大学が評価のしづらい汎用的能力の観点を知識や理解の観点に変更していた（寺岡先生：慶應義塾大学)。
- 学期途中で対面形式からオンライン形式へ変更する学生など対応基準が教員によって異なっており，基準作りが課題として残っている（木内先生：筑波大学)

〇具体的な評価観点について

- エクササイズ種目では、授業前後の体力変化を元にトレーニングプランを設定させる，それを元にレポートを提出させるなどの自己理解と評価・実行に関する理解を評価している授業があった。また，集団種目では，チームビルディングのための働きかけを評価の観点として入れている授業があった（上田先生：立命館大学)。

- オンデマンド形式授業の評価観点は，配信された教材に関する小テスト、エクササイズ課題に対して 6 割を超える提出があった場合に P（Pass）評価を与えていた（上田先生：立命館大学）。
- ライフスキル研究などの科学的知見を元に、学生の取り組む内容や評価する観点を明示して取り組みを評価している（西脇先生：大阪工業大学）。

本シンポジウムのテーマである評価について､2 大学の現状と今後の課題について議論がなされた。本シンポジウム全体の議論の中には,「授業のねらいとそれにつながる評価」という体育授業全体の設計についての話題も出ていた。体育授業の役割は何か。何を目的として実施し、それをどのように評価するかという大学体育の存在意義についての議論を今後深めていく必要があるのであろう。

総括

本シンポジウムでは､各大学､各シンポジストの考え･取り組みを提供していただくことができた。今回は，大規模大学の立命館大学と中規模大学の大阪工業大学の取り組みを聞くことができたが、評価の点について 2 大学においても異なる状況が見られた。大学の規模によって評価基準が異なってくることについて、議論を深めていく必要があると考える。COVID-19 感染拡大では、これに関わる事象よって学生がどのように変化したかをしっかりと見つめ､“体育人”である我々がフォローアップをどのようにしていくかを考えるきっかけを得た。今後は、体育実技の評価のありかたについて今回の経験を活かして検討を続けていくことが、我々に求められている課題と感じている（江口先生：産業能率大学・（公社）全国大学体育連合関東支部長）。

質問
評価基準を変更することは、学則など学内として問題はなかったか？
教養体育を担当する部門での会議を経て、上部部局、大学執行機関に確認をとった。それらの機関においては､「学びを止めない」という観点から問題がないということが確認できた（上田先生：立命館大学）

～事後アンケートの回答内容～

シンポジウム終了時から事後にかけて、意見・感想を自由に回答いただくアンケートを実施した。以下にその内容を記載する。

他学の方法などお示しいただき，たいへん興味深く，また参考となりました．このような機会をいただき，ありがとうございました．

皆さんの苦労がよくわかりました。

各大学での取り組み、評価について詳しく知ることができ、非常に勉強になりました。ありがとうございました。

大変参考になりました。

問題を共有できた点で、大変有意義でした。授業実施と成績評価は今後も改善の余地がある課題と考えておりますので、引き続きご指導いただければ幸いです。ありがとうございました。

日本体育・スポーツ・健康学会学会第７１大会から、テーマ別企画の一つに大学体育授業を設定しております。情報共有を含めて交流していくことができると嬉しく思います。

各大学での取り組みを知ることができ、非常に勉強になりました。

コロナ禍における取り組みについて，貴重なお話をお聞きすることができて，大変勉強になりました。オンラインでの工夫をされたからこそ，また，それらを通じた学生の反応が見えてきたからこそ，対面での実施の重要性が見えてきたのかなと感じました。ただ，作成したオンデマンド教材は今後も広く体育やスポーツを捉える上で有効なものと思われますので，「どう活用するか」ということがこれからの教育に求められるのかもしれないと感じました。また，それらは評価基準や授業でのねらい，到達目標をどのように設定するかにも関わるもののように感じました。自分の大学での授業にも活かしていきたいと思います。

本日は先生方の貴重な取り組みを伺う場を設定していただき，ありがとうございました．勤務先は，1 学年 440 名程度，半期に開講されるクラス 12 クラス，2020 年度後期から原則対面（前期はすべて不開講）と 2019 以前とほぼ同等の条件で授業を実施できましたが，今後，オンデマンド教材を組み合わせたりなど，新たな授業設計のイメージが少しつかめた気がします．

貴重な情報を提供いただき大変良い時間でした。評価規準を明確にすることで教員間の評価が均一にしていくことは大切ですので、共通教材の必要性を改めて考えさせられました。ありがとうございました。

シンポでご発表いただいた内容が風化しないように，その報告記事を紀要や学会誌，あるいは大体連の「大学体育」「大学体育スポーツ学研究」に投稿いただくよう，お願いしたいところです。本日はありがとうございました。

本年より大学で教員を務めております。各大学の評価の方法をお聞かせいただくことができ、大変貴重な時間となりました。特に教養体育ならではの、技能ではない部分を評価するという大阪工業大学の西脇先生のお話は興味深く拝聴させていただきました。

一方で、本シンポジウムの趣旨とは異なるかと思いますが、体育を専門とする大学での実技科目の実施や評価に関することにも興味があります。技能を評価しなければならないと思うので、非常にそこの苦労があるかと思いました。ぜひ今後もこのような各大学での取り組みをご提供いただけると若手教員にとって学びとなり幸いです。

ありがとうございました。

大変勉強になりました。各大学がコロナ禍にて苦慮しながらも工夫して授業を展開していることがわかりました。また、コロナ禍（オリンピックの延期・開催等含め）だからこそ、スポーツ・健康の意義を確認しました。他の学問にはない、スポーツ（体育）のオリジナリテイ―を再確認し、学内のスポーツ（体育）のカリキュラムの位置づけ、また授業展開（オンライン授業の可能性など）等含め、今後考えていきたいと思います。

立命館大学の上田先生ご発言の『実技である事の意義』のご意見に賛同いたします。が、本学では、個人的理由から教員サイドに対面免除を申請する方がおられ、その取り扱いに苦慮致しております。今年度は、その方に対面免除申請した学生向けのオンライン授業を担当いただきました。本件、学内的にも来年度に向けての検討課題となっております。

テーマであるオンラインの体育実技における成績評価、つまり実技部分をどのように評価したかと言う本質的なところにはほとんどお答えがなかった感じがしました。

評価基準、配点などの工夫や個人の感じたコミュニケーション観点での評価などはわかりましたが、結局のところ具体的な実技部分が不明瞭でした。

特に集団スポーツ、チームゲームのオンライン実技を行った先生などに、どのように集団でゲームが行えない中で評価をしたか、そういう具体的なことが伺いたかったです。

とても残念ですが今後対面に向かっていく中で、忘れ去られていくような、また開示しにくい内容だったからこそ聞きたかったのです。とても残念ですが貴重な機会をありがとうございました。

私は、一般教養の体育を担当していないのですが、一般教養の体育の成績評価の取り組みを聴くことができ、考える機会になりました。ありがとうございます。

各大学における取り組みについて、様々なパターンがあるとこがわかり、大変勉強になりました。

どの方法が正しいのかは、わかりませんが、各大学における教育の目的の設定が重要であることを痛感しました。大学における教育理念を踏まえて設定することにより、大学の特色ともなるのではないかと思いました。

今後の大学体育の在り方は、これまでのやり方に加え、新たな展開についても検討を進め、さらに進化した大学体育教育を構築すべく、このような課題について検討してゆかなければならないと思いました。

オンラインでの授業と同様、ネットを活用することで、講義や情報の共有が全国各地からたやすくなった一方、参加者間の情報共有や議論がなかなか難しい側面があることを感じ（同時に喋るとハウリングしてしまうし、マイクを瞬間的にはオフにしているなど、)、学生のコミュニケーションや社会性を高めるのが難しいことと共通しているのではないかと感じました。感想やコメントを述べてもらう役回りの人をあらかじめ、複数人決めておく、というのもこうした計画的な議論をするためには必要なのかもしれません。大変、授業の参考となりました。

1 点、成績評価について、ルーブリックを設けておくことも重要な側面ですが、それも難しい場合、また、なかなか組織全体で統一できない場合、「ミニマムリクワイアメント」という、単位取得には、この授業、最低限度、これを習得しないと、最低限度、これをしないと、60 点以上（合格）は出せない、出さない、という最低基準だけでも統一して設けておくことが組織として重要ではないかと木内先生のコメントなどを通じて感じました。また、学生からの何で不可なんだ？という質問に対する根拠につながるのではないか？という側面もあるかと感じます。これに、最大点数の 100 点（満点）の基準を統一させることで、おおよそ、ざっくりと、また、共通のものとできるかわかりませんが、応急的ルーブリックを運用できるのではないだろうかと感じた次第です。

とはいうものの、答えのない、1 つの課題に対して、議論をしつづけないといけない側面があるかと思いますので、今後も、こうした情報を共有する場を、設けていただけると大変ありがたく思う次第でございます。

感想です。

大学関係者ではないのですが、参加させていただきありがとうございました。大学もコロナ過で様々な課題があることがわかりました。評価の観点に「出席」があるのがびっくりしました。私は中学校教員ですが、現在 ICT を活用した授業を実施しています。生徒も ICT 機器を文房具のように使用している時代です。今後ドローンや VR などを取り入れながらの授業も入ることでしょう。そのような生徒たちが大学まで進んだ時、大学体育授業の役割もまた変化を要するのでしょうね。

世界的に DX が進み、この 2 年間の教育界での取り組みに、本学でも、若い教員を中心に大学組織と連携し、遠隔授業と対面授業のハイブリッド形式で行ってきた。本日の発表者も述べられていた

が、やはり、スクリーンでの授業より、実際にスポーツを教材に、双方向のコミュニケーションがある授業のほうが学生が得るものはかなり大きいものがある。若い先生方は、非常にレジリエンスが高く、皆さんの発表は大変参考になりました。ただ、38 年間大学で体育と言われる時代から、スポーツ実技、生涯スポーツと名称を変え、本学ではスポーツ・ライフスキルとして 1 回生の春・秋、2 回生の春・秋と 4 単位が必修化されました。その途端のコロナでしたが、8 人の担当者が協働しながら、教材づくりをし、大変学び深い 2 年です。学生も、自主的に、目標設定し、トレーニングを考え生活習慣を見直し、WHO のライフスキルについても学びを深め、自分のライフスキルの SWOT 分析し、行動変容を図るなどの学びに繋げています。これからの時代を生きる学生にとって、どのおおようなスキルを習得させるか、学生の気づきを如何に刺激できるかなど、それこそ、教員の信念、組織としての課題発見力も問われています。根底にある、学びの喜び、動く楽しさや成長の実感に繋げていきたいと常々思っております。教材の開発は重要です。

本学ではクリケットを教材にしておりますが、この教材は、かなり面白いものがあります。まずもって、誰もが体験したことのないスポーツだからです。動画コンテンツもかなり充実したものがあります。ローンボウルズなどのイギリススポーツは面白いです。大学の教員こそ、学んでほしいと願います。

本日は貴重な情報収集の機会を頂き、ありがとうございました。遠隔授業における各大学の成績評価方法の実態について、調査結果から詳しく理解することができました。高等教育における教養科目である以上は、成績評価方法は P/F 方式よりも KSA モデルを参考した 5 段階方式で評価されるべきだと考えます。今回発表された大阪工業大学では、授業内外でワークブックを全面的に活用されておりますが、近年は LMS を活用して課題を提示する大学が増えているかと思います。本学では、教養体育授業でのスポーツ実技経験について、その場でリフレクションすることが有効であることを根拠に、ワークブックを活用した授業内でのリフレクション活動の実施を検討しております。成績評価方法の材料にもなる受講生の毎授業のリフレクションについて、ワークブックを活用するのか、LMS を活用するのか、あるいはその他の方法で実施するのが良いのかなど、コロナ終息後を見据えた大学体育授業の今後の展開や展望について検討できましたら有り難いです。今後とも宜しくお願い申し上げます。

「体育実技」をオンラインで行うことの難しさを改めて実感しました。また、大阪工業大学の取り組みは非常に興味深く拝聴させていただきました。

成績評価という側面だけに焦点を当てれば、身体活動である体育実技（あるいは各種目）も何かしらの物差しをあてはめることで一定かつ公平な評価を設定できるかもしれませんが、果たしてそれが教科としての体育実技として適切なのか、ということはまだまだ難しい問題だと思いました。

コロナ禍が収まれば対面授業に戻す、というご報告がありましたが、それが一つの方向性、体育実技の本質を示しているのかと思いました。

2021 年度
慶應義塾大学体育研究所基盤研究報告書
2021 年 12 月 27 日発行
編集・発行 慶應義塾大学体育研究所
代表者 石手 靖
〒223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1
TEL.045-563-1111（代表）
http://www.hc.keio.ac.jp/ipe/
ⓒ2021 Keio University Institute of Physical Education
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。

慶應義塾大学体育研究所・(公社)全国大学体育連合関東支部共催シンポジウム

オンライン(遠隔)体育実技における成績評価を考える

開催日時：2021年12月11日(土)15:00～17:00
形　　式：Zoomによるオンライン開催

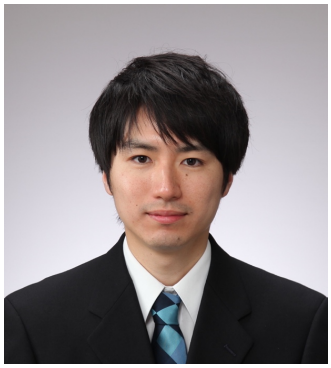
シンポジウムの趣旨

コロナ禍で大学体育にもオンライン（遠隔）授業が導入された中、昨年は、「コロナ禍のオンライン体育実技を振り返る～今後の遠隔実技のあり方と共に～」というテーマで議論を行った。その中で、遠隔授業の実施に対する新たな工夫や取り組みを知るとともに困難や課題も浮き彫りになってきた。その１つが、成績評価についてである。遠隔による実技実施では対面における実施内容を変更して実施せざるを得ない状況も生じていると考えられる。しかし、前回のシンポジウムでは十分に議論することができなかった。そこで、本年のシンポジウムでは、遠隔体育実技における成績評価の内容及び方法について、Webアンケート調査による実態の分析及び実際の事例報告を交え、その課題について議論する。そして、ポストコロナにおける大学体育のねらいと意義を再構築する糸口を探りたいと考える。

シンポジストならびにテーマ

『遠隔授業における大学体育実技の授業目標と評価方法に関する実態調査の概要分析』

寺岡英晋（慶應義塾大学体育研究所）



要旨：遠隔授業による大学体育実技の実施に関しては様々な新しい取り組みがなされてきた。しかし、遠隔授業による教育目標の設定や、その評価方法についてあまり議論が進んでいない実態がある。
そこで、慶應義塾体育研究所基盤研究３班（班長：村山光義教授）は、全国の大学を対象に、体育実技の成績評価の観点や方法に関して、従来の方針と遠隔授業による対応についてアンケート調査を実施した。本発表では調査結果の概要を報告し、遠隔授業における成績評価の観点と方法に関して見えてきた課題と今後の方向性について共有する。

略歴：寺岡英晋（てらおかえいしん）
慶應義塾大学体育研究所助教.
2012年 新潟大学教育学部卒業.
2014年 筑波大学大学院体育学専攻修了.
2020年 英国ストラスクライド大学大学院教育学専攻修了．Ph.D.（教育学）.
2020年度より現職．体育実技の担当は卓球.

『遠隔授業における成績評価のありかた ～評価方法の変更を例に～』

上田憲嗣（立命館大学スポーツ健康科学部）

要旨：立命館大学の教養教育としてのスポーツ実技授業は、2020年度当初のコロナ禍の影響を受けて春学期は休講、その後WEB（オンデマンド）授業へと切り替わった。また、2021年度は、対面による実習授業を基本としながらも、オンライン授業コンテンツも活用するハイブリッド型の授業運営となった。これにともない、2020年度は実習科目としての目的が十分に達成できないことを受けて、これまでの５段階評価をP/F評価へと切り替えた。当日の発表ではこうした成績評価基準の変更に至った経緯やその実際について報告予定である。

略歴：上田憲嗣（うえたけんじ）
立命館大学スポーツ健康科学部准教授
立命館大学教養教育スポーツ健康科目担当連絡会議議長
専門競技はバレーボール、ライプチヒスポーツ科学交流協会理事

『遠隔授業における成績評価の事例報告 ～講義・実技・演習の複合スタイルを例に～』

西脇雅人（大阪工業大学工学部）

要旨：大阪工業大学の「健康体育」（1年生対象、半必修）は、講義・実技・演習の複合スタイルの授業であり、全コースで統一ワークブックを用い、明確な共通の成績評価基準を定めてきた。
2020・2021年度は、COVID-19感染拡大のため、関係各所からの様々な要請と制約から、オンライン授業が中心となり、ワークブックも紙媒体からデジタル媒体に変化した。しかし、評価の項目、方法、割合を変える必要はなく、従来の基準を用いて成績評価を行っている。本シンポジウムでは、1）「健康体育」の内容と評価方法、2）COVID-19感染拡大への対応状況、を紹介し、現行スタイルに至った経緯や課題、問題点に触れつつ、今後の大学体育授業のあり方について議論を深めていきたい。

略歴：西脇雅人（にしわきまさと）　博士（体育学）
大阪工業大学工学部総合人間学系教室准教授
鹿屋体育大学大学院博士後期課程修了
専門は運動生理学・健康スポーツ科学

【指定討論者】

江口 潤

（産業能率大学情報マネジメント学部・(公社)全国大学体育連合関東支部長）

【コーディネーター】

永田直也

（慶應義塾大学体育研究所）

公益社団法人
全国大学体育連合